

四恩という思想

さて、唐から帰って来た空海だが、持ち帰って来たのは“密教”という新しい教え。加えて五明など実学に関する物も日本に持ち帰って来ている。

そんな中、“四恩”という思想も請来している。これはどういったものなのか、ここで見ておきたい。

帰国後、空海の密教弘法の上で、様々な祈願をする際の願文にも度々この言葉が見られる。“四恩”とは真言密教のひとつの大きなキーファクターとなっている。四恩とは以下の四つの恩である。

1. 父母の恩
2. 衆生の恩
3. 国王の恩
4. 三宝の恩

“四恩”という、『心地観経』に説かれるこの思想は、訳者の般若三蔵から直接相伝されたものだ。

まず、一つ目の父母の恩というのは、特に説明もいらないうえ、自分にこの世での生を授けてくれて、育ててくれた父母に対する恩。

当時の教育では儒教が重要視されていた事もあり、父母に対する恩、親孝行は勿論、真言密教の専売特許というものではない。

ただ、真言密教の場合、そこには、鎮護国家に欠かせない国王の恩があり、我と衆生と仏の三身平等という基本概念が絡み合って含まれているから、父母の恩以外の3つも含めた四恩のひとつとして重視しているのだ。

二つ目の衆生の恩というのは、この世の中、それぞれが何かしらの役割を持ちながら、人と人、人と動植物などが、目に見える所、見えない所でお互いに支えあい、助け合いながらこの世を生きている、そのことに対する恩とおもっ

てみればよいか。

例えば、日々口にする食べ物にしても、それを畑で育てる人、海や山から取ってくる人、それらをあらゆる場所に届ける人、調理する人、色々な人が関わってようやく口にすることが出来ている。そういった物心両面にわたり支えあっている周りの人々に対する恩ということ。

三つめは国王の恩。私自身これはどう捉えればよいのか少し戸惑う所もある。国王というのは、今の日本で言ったら、天皇陛下にあたるのか、または実際に国の政を行っている総理大臣などがこれにあたるのだろうか？

ただ、少なくとも日々過ごす地、安住の地として、いまこの国土に住むことが出来ているという事に対して、為政者の恩を感じずにはいられないだろう。古来の争いは一つにはその領土を巡ってのものであるのだから。

四つ目の三宝の恩というのは仏・法・僧の三宝に対する恩ということ。即身成仏という、究極の現世利益に導く真言密教に対する恩で、空海はこれを弘めることによって報恩とした。二つめにあげた衆生の恩は、支えあう人々に対するものであったが、この三宝の恩の中には、人に対する物だけでなく、それ以外の有情無情（非情）すべての物に対する恩が含まれている。

この四恩というのは、元来、密教の教えというものではないが、空海の生来の気性と相俟って、密教を体得するのに重要な要素だったと思われる。また、空海を思想を反映させた真言密教として確立していく上で、これをひとつの大きな柱として、自身だけでなく、真言密教の道を進まんとする者にとっても心に留めおくべきことであると教示している。

そのことが書かれているのは、813（弘仁四）年、空海40才の時、真言密教の本旨を示すために書かれた『遺戒（弘仁の御遺誡）』だ。これは立教開宗の大宣言とも言われているが、それは密教教団の僧の根本的なあり方を弟子

達に明示した物でもある。『弘仁の御遺誡（遺戒）』によると

密教の戒とは三昧耶戒である。・・・この戒の精神に則って、本尊の三摩地と三密瑜伽し、速やかに迷いの執着から逃れて、覚りの無上正等菩提（覚りの境地）に至って、自利（自ら覚りを得ることによって、この迷いの世界から脱すること）と利他（他人の為に利益となることをすること）の両方満ち足りるようにして、父母、衆生、国王、三宝の四恩に奉じなさい。

とある。四恩という形で空海に授けてくれたのは、般若三蔵という人だが、密教を授けてくれた恵果阿闍梨にもこれに近い報恩思想は読み取れる。弟子の空海に密教を日本に帰って弘めるように告げる場面で、その意義として報恩について述べている。『御請来目録』によると

（密教を日本に持ち帰り、天下に弘めて衆生の増福に努めよ）このことは、仏恩と師恩に報いる事になるのだ。それは、国家の為には忠義を示す事になり、家では孝行した事になる。義明はこの唐で密教を弘め、伝えなさい。空海は東の日本に伝えなさい。二人とも努め励みなさい。

とある。ところが、帰朝してから密教の弘法に際し、空海はしきりに四恩を推奨しているのだが、自身の親に対する孝行は見られない。

例えば、両親に対しての手紙は一通も残されていないのだ。空海ほど著作の多い宗教開祖も稀で、筆を持つ事は苦にしている様子は無く、最澄や天皇との手紙のやり取りも数多く残されているのにだ。わざわざ会いに行く事が困難でも、手紙くらいは出していても良さそうなのだが。

四恩を度々強調しながら、その啓蒙を図る空海だが、その第一の父母の恩に関して、自身ではその恩に報いる事もなかったのだろうか。